

2019年4月14日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「キリストの受難から見えてくるもの」

聖書:ルカ福音書23:26~43

キレネ人シモンが登場する。彼は何故十字架を無理やり背負わされたのか？偶然か？キレネ人とはアフリカ系。シモンは「田舎から出てきた」とあり、ここは兵士らによる差別的な選択があるかと思う。もし群衆のユダヤ人の中から選べば反発を受けると考えたであろう。そこで如何にも外国人であろう肌の黒い異邦人を見つけ、こいつに担がせば誰も文句はないであろうと差別的な視点があったと思われる。案の定シモンが十字架を背負わされた時、群衆はただの傍観者でしかない。誰一人シモンを助けようとする人はいない。この差別的に十字架を背負わされることは、さまざまな場面で、歴史の中で見られること。

今月28日は、1952年「講和条約」が施行された日。戦後日本が主権を回復した日になる。しかしその中で沖縄は日本と切り離されて米国の支配下に置かれた。沖縄ではこの日を「屈辱の日」と呼ぶ。「沖縄ならいいだろう」と十字架を背負わせられた。キレネ人シモンと沖縄が重なる。

イエスは十字架にかけられ、人々にののしられて行く。「他人は救ったのに自分は救えない」と。このことはイエスご自身の生き方を表していることではないか。人はしばしばこう言う。「自分の頭の蠅も追えないくせに、他人の世話をしたり、他人を救ったりできるわけがない。まず自分の頭の蠅を追い払ってからやりなさい」と。キリスト教会でも「自分の魂が救われ、そして他者を救う」と順番を教会が決め付けてはいないだろうか？

イエスの宣教の歩みは荒野でサタンの誘惑から始まる。サタンはイエスに自分の力で空腹を満たすようにと言う。また自己救済の誘惑を経て世界支配への誘惑へと至る。自分のパンを求める思いは自己救済に向かい、ひいては世界支配欲へと至ることを示す。イエスはその誘惑をすべて退けた。その後、病や貧しさに身を置いている人々、自分の置かれた状況に自分ではどうすることもできない人々のところへ行かれた。イエスは彼らに、「自分の頭の蠅は自分で払え」などとは言わない。「あなたが罪を悔い改めれば、病も克服され、飢えている状況も改善しますよ」とは一切言わない。イエスはひたすらそれらの人たちに真心から仕え、共に食卓を囲み、彼らの尊厳を回復しようと努める。そして同時に、それらの人たちを貧しさと差別の中に追いやり続ける社会のありように憤りと嘆きをもって立ち向かって行かれた。イエスはそういうお方ではなかったか。受難の出来事には私たちへの慰め、励まし、勇気に繋がるメッセージが見える。(神谷)